

2. 研究の詳細

プロジェクト名	生活科・総合的な学習の時間で育てたい資質・能力に関する研究		
プロジェクト期間	平成29年4月～平成30年3月		
申請代表者 (所属講座等)	菅沼 敬介 (教職教育院)	共同研究者 (所属講座等)	津川 裕 (生活総合教育講座) 福重秀人 (教育学部非常勤講師)
<p>① 研究の目的</p> <p>＜研究の全体構想＞</p> <p>本研究は、教育職員免許法の一部改正に伴い、平成29年度から開講されている総合的学習指導法や教科横断的な資質能力育成の科目において育みたい資質・能力を、これまで小中学校において実践されてきた生活科や総合的学習の時間の理論や実践例を再考し利用することで明らかにするものである。平成元年の学習指導要領において新設された生活科も、平成10年の学習指導要領において創設された総合的学習の時間も主体的で探究的・協働的な学びを目指したものである。つまり、現在求められている資質・能力育成を30年前から実践してきた教科と言える。そこで、実際に児童生徒として受けてきた学生にとって、経験から見出す学修こそが高等教育の目的に合う資質・能力ではないかと仮定し解明する。また、どの教科等においても、資質・能力が述べられた次期学習指導要領において、生活科や総合的な学習の時間が、どの資質・能力に独自性をもって発展していくか、今後の展望の解明が、充実した学修に繋がると考え研究する。</p> <p>＜研究での具体的な取り組み＞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 本学学生の生活科・総合的な学習の時間における教科観を解明する。 2) 生活科・総合的な学習の時間の理論を先行研究を基に再考し、生活科・総合的な学習の時間で育むべき資質・能力を構築する。 3) 生活科・総合的な学習の時間の授業実践から今後育てたい資質・能力の分析を行う。 <p>＜研究の目的と予想される結果・意義＞</p> <p>平成28年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では、「教科等間の関係性を深める」ことや『『何ができるようになるか』を意識した指導を求めることで資質・能力に着目すること』が記されている。全ての教科等で関係性や資質能力の重要性が述べられているからこそ、生活科・総合的な学習の時間の独自の育むべき資質・能力を再構築していく必要性を考える。資質・能力は系統的教科と体験的教科の独立した両輪で回ることによって育まれるものではないが、各教科等が融合して一輪になってしまえば、各教科の特質は見落とされてしまうことが懸念される。そこで、再構築し今後の子供たちに生活科・総合的な学習の時間で育てたい資質・能力を提示することで、今後の教育現場を担う本学学生に対して学修を行うことは教育の指針となり十分な意義をもつ。</p> <p>② 研究の内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生活科・総合的な学習の時間の認識に関する実態調査研究 2. 生活科・総合的な学習の時間で育みたい資質・能力の先行研究分析 3. 生活科・総合的な学習の時間の授業実践研究 (4. 本研究を生かした「総合的学習指導法」の受講学生への意義と効果) <p style="padding-left: 40px;">* 4については、今後の展望に記す。全ては、平成30年度中にプロジェクト外で発表する。</p> <p>③ 研究の方法・進め方</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生活科・総合的な学習の時間の認識に関する実態調査研究 <p>児童生徒で生活科・総合的な学習の時間の授業を受けてきた本学学生が、教育職員の立場として生活科・総合的な学習の時間の単元や授業をつくる際の課題を明確にするために本研究を行う。</p> <p>生活科の認識に関する実態調査は、平成29年度入学の学生に対して「教育指導法科目」受講初期の段階で意</p>			

識調査を行い分析する。指導の立場での学修をしていない学生を対象にしたのは、自身の受けてきた授業の認識をそのまま反映した試料や、教育職員としての知識や思い込みに影響を受けない試料を求めるためである。実際に児童の立場として授業を受けてきた時の、生活科の認識と記憶に強く残っている授業を回答させる。

総合的な学習の時間に関する実態調査は、平成28年度に入学した学生に対して「総合的な学習指導法」や「教科横断的な資質能力育成」の受講希望者を対象に受講初期の段階で、総合的な学習の時間の意識調査を行い分析する。分析にあたっては、指導の立場での学修をしていない学生を対象にしたのは、自身の受けてきた授業の認識をそのまま反映した試料や、講義の内容に影響を受けない試料を求めたためであり、児童生徒の立場として授業を受けてきた時の、総合的な学習の時間の認識と記憶に強く残っている授業を回答させる。

2. 生活科・総合的な学習の時間で育みたい資質・能力の先行研究分析

生活科で育みたい資質・能力を、平成元年告示の小学校学習指導要領第2章各教科第5節生活から見出す。見出された資質・能力を基に、日本生活科・総合的学習教育学会誌「せいかつか&そうごう」及び愛知教育大学生生活科教育講座紀要「生活科・総合的学習教育研究」、初等中等教育局教育課程課教科調査官として生活科の担当をした歴代教科調査官の著書及び編著書の先行研究の分析を行う。平成元年告示の学習指導要領にて新設された当時から、資質・能力の育成が記されていた生活科において、30年間でどのような研究が行われ、どのような成果があったのかを明らかにする。

総合的な学習の時間で育みたい資質・能力を、平成10年告示の小学校学習指導要領第1章総則第3総合的な学習の時間の取り扱いから見出す。見出された資質・能力を基に、日本生活科・総合的学習教育学会誌「せいかつか&そうごう」及び愛知教育大学生生活科教育講座紀要「生活科・総合的学習教育研究」、初等中等教育局教育課程課教科調査官として総合的な学習の時間の担当をした歴代教科調査官の著書及び編著書の先行研究の分析を行う。平成10年告示の学習指導要領にて創設された当時から、横断的・総合的や資質・能力の育成が記されていた総合的な学習の時間において、20年間でどのような研究が行われ、どのような成果があったのかを明らかにする。

3. 生活科・総合的な学習の時間の授業実践研究

先行研究から明らかになった生活科・総合的な学習の時間で育みたい資質・能力の理論とその取り組みを基に、教育現場の実際の授業を調査した。愛知県豊川市立東部小学校において生活科（1年生単元「こんなに できるように なったよ」）を、愛知県豊川市立御油小学校において小学校における総合的な学習の時間（4年生単元「ふるさと御油」）を、愛知県安城市立桜井中学校において中学校における総合的な学習の時間（1年生単元「知ろう！伝えよう！桜井の文化財」）の授業実践を計画、実施し、その有効性を明らかにした。

授業実践の計画の際、研究者（プロジェクト申請者）は生活科・総合的な学習の時間で育みたい資質・能力を意識した計画を提案し、実践者（授業実践協力学級の担任）は、学級の児童・生徒の実状に応じて計画を提案する。2つの提案の擦り合わせを行い、目指す子ども（生徒）の姿を想定し詳細な実践計画を作成する。

授業実践の実施は、実践者が行い、学習指導要領に定められた授業時間を守り行う。なお、研究者が不在の際も、計画に応じて実践者が授業実践を進めていく。

④ 実施体制

1. 申請代表者

(1) 菅沼 敬介（教職教育院）

- ・プロジェクト研究全般、計画、マネジメント、授業実践参観等。
- ・成果のまとめ執筆。

2. 共同研究者

(1) 津川 裕（生活総合教育講座）

- ・生活科・総合的な学習の時間の認識に関する実態調査の実施
- ・生活科・総合的な学習の時間で育みたい資質・能力の先行研究分析

(2) 福重 秀人（教育学部非常勤講師）

- ・生活科・総合的な学習の時間の認識に関する実態調査の実施
- ・生活科・総合的な学習の時間で育みたい資質・能力の先行研究分析

3. 研究協力者

- (1) 竹田 寛 (豊川市立東部小学校校長)
 - ・小学校における生活科・総合的な学習の時間の実態調査の実施
 - ・生活科及び小学校の総合的な学習の時間の授業の計画及び実施
- (2) 都築 智 (安城市立桜井小学校校長)
 - ・中学校における総合的な学習の時間の実態調査の実施
 - ・生活科及び小学校の総合的な学習の時間の授業の計画及び実施
- (3) 久米 洋平 (安城市立桜井中学校教諭)
 - ・中学校の総合的な学習の時間の授業の計画及び実施

⑤ 平成 29 年度実施による研究成果

1. 生活科・総合的な学習の時間の認識に関する実態調査研究

(1) 生活科の認識に関する実態調査

- 1) 調査時期 平成 29 年 4 月 17 日 (生活科指導法 2 回目の授業時)
- 2) 調査対象 生活科指導法の受講学生 223 名 (平成 29 年度入学生)
- 3) 質問紙の質問項目

- 生活科でどんな授業を受けたか覚えていますか
- 生活科に対してどんな印象で受けていましたか
- 生活科はどんな教科であるとイメージしていますか
- 覚えている生活科の授業の内容は何ですか
- あなたが教師になった際に、生活科授業で取り扱いたい内容は何ですか

4) 結果

「生活科でどんな授業を受けたか覚えていますか」の質問に対し、「よく覚えている」「やや覚えている」「ところどころ覚えている」「あまり覚えていない」「全く覚えていない」の 5 段階評定で回答を得た。「よく覚えている」と回答した学生は 3.6% であり、低学年の記憶はほとんど残っていないことがうかがえる。

「生活科に対してどんな印象を受けていましたか」の質問に対し、「大好きな教科」「どちらかと言うと好きな教科」「あまり好きではない教科」「大嫌いな教科」「全く覚えていない」の 5 段階評定で回答を得た。「大好きな教科」「どちらかと言うと好きな教科」と比較的肯定的な印象であると回答した学生は 86.5% に上った。

「生活科はどんな教科であるとイメージしていますか」の質問に対して、「社会科・理科の低学年版」「生活や生き方に必要なものを学ぶ」「探検や栽培など、体験を通して学ぶ」「自然と触れ合いながら学ぶ」等、8 項目立て、もっともイメージの近いものの回答を得た。「探検や栽培など、体験を通して学ぶ」と回答した学生が 33.6% と最も多かったが、「社会科・理科の低学年版」と回答した学生も 16.4% であった。

「覚えている生活科の授業は何ですか」の質問に対して、「学校探検」「家族について」「町探検」「季節の遊び」等、生活科の 9 つの内容に合わせて項目を立て、複数回答可で回答を得た。「飼育・栽培」と回答した学生が 73.5% に上り、「町探検」と回答した学生が 57.1%、「学校探検」と回答した学生が 53% と続いた。具体的な活動や体験を示した項目が上位を占めている結果が得られた。

「あなたが教師になった際に、生活科授業で取り扱いたい内容はなんですか」の質問に対して、前問と同様の項目に複数回答可で回答を得た。上位は、前問と同様に「飼育・栽培」「町探検」「学校探検」の結果が得られた。

5) 考察

- ・生活科に対して肯定的な記憶(思い出)があるものの、詳細な記憶に対しては曖昧である。
- ・社会科・理科の低学年版と認識している学生が 16% であり、生活科が新設されて 10 年以上過ぎてから授業を受けた学生にも「低学年社会」や「低学年理科」の意識が間接的に残っていると見える。
- ・具体的な活動や体験を提示すると、比較的覚えている学生が多く、覚えている活動は、教員になった際に、実際に取り扱いたいと考えている。

(2) 総合的な学習に関する実態調査

- 1) 調査時期 平成 29 年 5 月中旬 (総合的な学習指導法、教科横断的な資質能力育成の 3 回目の授業時)
- 2) 調査対象 総合的な学習指導法及び教科横断的な資質能力育成の受講学生 411 名 (平成 28 年度入学生)

3) 質問紙の質問項目

- 小学校時代の総合的な学習の時間に関する質問 (6問)
- 中学校時代の総合的な学習の時間に関する質問 (6問)
- 高等学校時代の総合的な学習の時間に関する質問 (6問)

4) 結果

「小学校の総合的な学習の時間について覚えていますか」の質問に対して、「よく覚えている」「やや覚えている」「ところどころ覚えている」「あまり覚えていない」「全く覚えていない」の5段階評定で回答を得た。「よく覚えている」「やや覚えている」と比較的覚えていた学生は50%であった。更に「あまり覚えていない」「全く覚えていない」と回答した学生に、何故覚えていないのかを質問したところ、「学習したが覚えていない」と回答した学生が48.8%であった。

「中学校の総合的な学習の時間について覚えていますか」の質問に対しては、比較的覚えていたのが34%であった。更に「あまり覚えていない」「全く覚えていない」と回答した学生に、何故覚えていないのかを質問したところ、「学習した記憶が無い」と回答した学生が28%であった。

「高等学校の総合的な学習の時間について覚えていますか」の質問に対しては、比較的覚えていたのが35.8%であった。更に「あまり覚えていない」「全く覚えていない」と回答した学生に、何故覚えていないのかを質問したところ、「学習した記憶が無い」と回答した学生が59.4%であった。

「よく覚えている」「やや覚えている」「ところどころ覚えている」と回答した学生に、「何についての学習か」の質問に対して、「地域の地理や自然」「地域の伝統や文化」「地域の特産物」「仕事や職業、進路」「学校行事」「外国語活動や国際理解」「情報教育」「自由(課題)研究」の項目から選択法で回答を得た。小学校では、「地域の地理や自然」「地域の伝統や文化」「地域の特産物」と、「地域」に関わる学習を覚えていると答えた学生が50.3%であった。中学校では、「仕事や職業、進路」が33.8%で最も多く、続いて「学校行事」が25.4%であった。高等学校では、「仕事や職業、進路」が34.1%で最も多く、続いて「学校行事」が18.4%であった。

5) 考察

- ・学校種が上がるにしたがって総合的な学習の記憶が無くなり、印象的な授業がなされていないことが考えられる。中学校と高等学校の結果は同程度の比率であったが、中学校に比べ高等学校はごく最近であるにも関わらず同程度であることは、実質覚えていないと考えられる。
- ・学校種が上がるにしたがって「学習した記憶がない」の割合が増え、実際に「総合的な学習の時間」が行われていない懸念も考えられる。
- ・小学校では「地域に関する学習」、中学校、高等学校では「仕事や職業、進路」を最も記憶に残る活動としている割合が高い。地域に関する学習をじっくり行うと記憶に残りやすいことが考えられる。

2. 生活科・総合的な学習の時間で育みたい資質・能力の先行研究分析

(1) 生活科で育みたい資質・能力の先行研究分析

平成29年告示の学習指導要領及び学習指導要領解説生活編における「資質・能力」の記載、PISA型学力「キー・コンピテンシー」の理論、野田(2013)「生活科で育った学力についての調査研究」、生活科新設当時の理念と目指した資質・能力から、生活科の学習要素を分析すると、以下の5点に示すことができた。

- 1) 実生活、実社会から子供の思いや願いに添った学習課題を掘り起こすこと
- 2) 具体的な活動や体験を通すこと
- 3) 学びの過程で、子供の思いや願いがさらに高まること
- 4) 子供が主体的に気付きの質を高めること
- 5) 実生活、実社会に学びを返していくこと

1)～5)の生活科の学習要素から、育むことの出来る資質・能力を考えると、「主体的に対象に関わる力」「じっくりと対象に関わる力」「思いや願いを実現させる力」が挙げられる。

(2) 総合的な学習の時間で育みたい資質・能力の先行研究分析

平成29年告示の学習指導要領及び学習指導要領解説総合的な学習の時間編における「資質・能力」の記載、目賀田八郎、中野重人(2000年)『総合的な学習は学力崩壊か学校再生か』(東洋館出版社)、藤井千春(2015年)『アクティブ・ラーニング授業実践の原理』(明治図書)、総合的な学習の時間創設当時の理念と目指した資

質能力から、総合的な学習の時間の学習要素を分析すると、以下の5点に示すことができた。

- 1) 生徒が強い学習意欲をもつ学習対象
- 2) スタートとゴールを固定しない学習過程
- 3) かかわり合いを大切に作る協同的学習

1)～3)の総合的な学習要素から、育むことの出来る資質・能力を考えると、「意欲をもって対象と関わる力」「生涯に渡り学習を持続させる力」「協同的に学習する力」が挙げられる。

3. 生活科・総合的な学習の時間の授業実践研究

豊川市立東部小学校で生活科1年生単元「こんなに できるように なったよ」の実践を行った。

豊川市立御油小学校で総合的な学習の時間4年生単元「ふるさと御油」の実践を行った。

安城市立桜井中学校で総合的な学習の時間1年生単元「知ろう！伝えよう！桜井の文化財」の実践を行った。

各授業実践は単元計画から行い単元を通して、生活科・総合的な学習の時間で育みたい資質・能力の一端を見出す結果が得られた。

⑥ 今後の予想される成果

1. 学問的効果

- (1) 生活科で育むべき資質・能力の明瞭化及び具体化
- (2) 総合的な学習の時間で育むべき資質・能力の明瞭化及び具体化

2. 社会的効果

- (1) 生活科・総合的な学習の時間の授業実践の充実
- (2) 生活科・総合的な学習の時間で育むべき資質・能力を期待できる授業実践の提供
- (3) 福岡教育大学における「生活科指導法」「総合的学習指導法」の充実による卒業生の実践力向上

⑦ 研究の今後の展望

本プロジェクトの成果を、「生活科指導法」及び「総合的学習指導法」、「学校教育課題研究」に寄与することにより、それらの教科等に対する授業実践力の育成につながるのではないかと考える。例えば地域性や子供の姿が確定していない学生の立場では作成し辛いと考えられる、生活科・総合的な学習の時間の仮想単元計画や仮想指導案の具体的な方向性や目標を提示できるのではないかと考える。実際に平成29年度後期の「総合的学習指導法」の講義で本プロジェクトの成果を生かし取り入れた講義展開で実施している。講義の最終回には、受講学生に質問紙調査を行い、本講義の意義や価値を回答させている。80%を超える学生が「総合的学習指導法」に満足しており、教員志望の学生の100%が「総合的学習指導法」の成果を実際に試したいと回答している。この成果の詳しい分析は、2018年九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 Vol.6 に執筆及び投稿予定である。

⑧ 研究期間中の主な学会発表及び論文等

1. 学会発表

- (1) 「生活科における『言語活動の充実』を意識した授業に関する研究」
菅沼敬介 日本生活科総合的学習教育学会第26回全国大会東京2017 (2017)
- (2) 「主体的に学びに向かう生活科授業」
菅沼敬介 日本理科教育学会第67回全国大会福岡大会 (2017)
- (3) 「主体的に学びに向かうことで『自己肯定感を高める生活科学習』に関する研究」
菅沼敬介 日本生活科総合的学習教育学会第27回全国大会北海道大会 (2018) 発表申込済

2. 論文

- (1) 「主体的に学びに向かうことで『自己肯定感を高める生活科学習』に関する研究」
菅沼敬介・野田敦敬 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第3号 査読有 (2018)
- (2) 「中学校における総合的な学習の時間の在り方に関する研究」
菅沼敬介 福岡教育大学紀要67号 第4分冊教職科編 査読有 269-277 (2018)
- (3) 「『対話的な学び』につながる、生活科の源流に関する基礎的研究」
菅沼敬介 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 Vol.5 No.1 査読有 (2017)